

— 連載 —

美術館のある風景 (第22回)



トゥールーズ＝ロートレック展
(2011年10～12月開催、三菱一号館美術館)

夏の美術館は涼しくて…

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二

夏の美術館は涼しい、いえいえ、寒いと感じることもあるでしょう。そして、冬は暑いとも。冬はコートを脱いだりして調整できますが、夏は羽織るものが無いと辛いものです。また、展示会場は暗い、特に和紙に描かれた日本画や版画の展示で感じるかもしれません。

こうしたことは、快適な美術作品の鑑賞を願う美術館にとっても難問です。

美術館は、快適な鑑賞環境を提供したい一方で、美術品の保全を優先的に図らねばなりません。芸術的資産を後世に伝える為には必要なことです。美術品の保全には、温度、湿度や照度に細心の注意を払います。温度と湿度は常に一定の値を保ち、変動幅も極力小さくしたいのです。三菱一号館美術館の展示会では、標準的な設定温度を21℃、湿度を50%、温度の誤差を±2℃以下、湿度の誤差を±3%以下で運用しています。夏の屋外から展示室に入ると寒いと感じる由縁です。洋画や日本画、版画、写真など、作品の特性で設定値は多少異なります。では、温度や湿度の攪乱要因は何か、人間の発熱が大きな要因です。特に小さな展示室では、空間の体積が小さいので室内の人間の密度の負荷は相対的に大きくなり気を遣います。また、美術品に当たる光の制御も美術品の保全には重要です。和紙等の紙類の作品は展示期間を短く設定し、押え目な照度にして作品に当たる光を少なくします。色褪せ等を避ける措置です。借用作品の展示では、借用先に温湿度や照度等の環境制御の

内容を確認しますし、記録を残す必要もあります。展示環境の制御は美術館の信頼を支える重要な要素なのです。

このような環境制御は、鑑賞の際に、寒い、暑い、暗いと感じることに繋がります。夏にショールを用意する等の工夫はなされますが、十分とはいかないようです。また、生きた花や緑も禁物です。植物の種や菌類、昆虫等の生き物の侵入は美術作品の大敵です。お祝いに戴いた花を飾れず申し訳なく思うこともあります。微細な生物は、自然と侵入したり人間に付いて来たりしますので、展示会場の定期的な調査や予防・対策が必須です。カーペット等の布類にも付き易いので気をつけます。

しかし、展示会のミッションの一つは、快適な環境下での作品鑑賞です。有料であれば尚更です。来館者の声に耳を傾けてハード面の改善やソフト面でのサポート等の恒常的な努力や取組が必要です。アンケートのご意見は大切な気づきの機会となります。

少し視点は変わりますが、最近の情報通信技術の超速の進歩は美術の研究や教育普及の面で可能性を広げています。東京藝術大学等でも意欲的に取組まれています。人間の眼を超える精度での分析や再現技術、そして高速で広範な伝達技術は、美術館でのリアルな体験と美術作品へのアクセスの多様性と相俟って、鑑賞する側にも多大な貢献が期待されると感じています。